

## 「食」を通じての社会連帯

本誌で本テーマを特集する意味として、食が人と人との結びつきを強め、社会を変える原動力となりうる協同・連帯のきっかけを生み出すと考えたからである。そこであらかじめ、編集部からご執筆した方々にはどのようなところとつながり、何を共に行なってきたのかを重点にしてご執筆いただくことをお願いした。本号で掲載した5つの報告はフードバンク、子ども食堂の実践、食の安全性をテーマにしているが、食が人としてよりよく生きる意味を様々な角度から具体的に深めるレポートになっている。その意味で「食とは何か」の問いを読者の皆さんに鋭く問う内容となっている。

座談会を行なった「みんなのふくろう食堂」は、「地域」を言葉で考えるのではなく、1人ひとりの置かれている具体的な状況から、固有名詞で一人ひとりと具体的につながることの大切さを教えてくれている。地域をつくるのは人であり、人と人がつながること、どのように変化したのかに焦点をあてた座談会になった。またこの座談会は食の持つ意味について多様な意見が出た場となった。さらに食に関わることを「事業」として行うのか、「活動」として推進するのかの話題も出たが、ワーカーズコープの食事業がほぼ赤字の状況のなかで、社会をつくる視点からこれから考えていきたい論点が出されたように感じた。

「おけまる食堂」では、中学生・高校生・大学生が多く参加した場をつくっている。参加するきっかけをつくっているのが、来ている人との出会いと雰囲気である。結果、子ども・若者の居場所となっている。居場所から子ども・若者の本音や悩みが語られる。自らのほっとできる、考えていることを言える場所の大切さをおけまる食堂の実践から学ぶことができる。

「フードバンクにいがた」「フードバンクちば」の取り組みは、県単位で食を通じた多数のネットワークを構築し、地域福祉を推進する上でなくてはならない存在となっている。フードバンクは社会的必要性がとて高いが、継続的に運営する課題(人的・金銭的)を抱えるなかで、一民間組織で行うことの限界や、自治体等の公共団体の役割は何かを鋭く問う中身にもなっている。フードバンクを通じて多数のつながりができるが、そのつながった後に、どう継続的に発展できるのかがフードバンクの未来の展望を描く上で不可欠なことであると感じた。その意味で本当の連帯とは何かという問いも出していただいた。

元農林水産大臣の山田正彦さんには、『売り渡される食の安全』(角川新書)が出版される2日前のお忙しいなか、取材をさせていただいた。取材を通じて、食が人と人をつなげるという良い意味だけではなく、食物のものの「種」や食物を育てる「土・肥料」などが、多国籍アグリ企業によって市場化され、食の安全が脅かされている現実があることを紹介している。食べることで全てお金に変えられていくことへの警告とともに、その状況を打開するためには、子どもたちが食べる給食をオーガニック化することの動きも紹介されたが、地域・地方で循環し、食が命につながるものとしての動きを、市民一人ひとりがつくることの大切さを感じるものとなっている。

当初本号は、協同の発見誌312号(2018年11月号)、『農・エネルギー分野における循環型経済・社会づくり』の「食」版として企画した。編集を通じて、食が持つ多様な価値・意味に驚かされたのと同時に、食の持つ正の部分(魅力)とともに負の部分(課題)も見ていく必要性を痛感した。ご一読いただきたい。

相良 孝雄(協同総合研究所 事務局長)